

葉集を読む

松岡 隆子

ちたと思うと急に起き上がったって飛び始める。掲句は金亀子の一瞬の行動をすかさず捉えて実感のある一句を成している。〈ころんと起きて〉はまさに実感。

夕焼けと灯台の灯と潮騒と

安達みわ子

空一面の夕焼けと夕焼に染まった海と岬の先端の白い灯台の景が一枚の絵として描かれている。夕焼け、灯台の灯、潮騒という三つの言葉が「と」という助詞で繋がれて一つの詩の世界を生み出している。それぞれの言葉自体に詩があるからである。

しづかにも一夏過ぎゆく百日紅

早出 誠治

炎暑の中けむるように咲いていた百日紅もいつの間にかしかりに散りだした。百日紅もひと夏の日々もしづかに終わろうとしている。〈しづかにも〉の詠嘆はある齢になつて感じる感慨とも言えよう。作者の夏百日を百日紅が静かに受け止めている。

六月や何か急かされるやうな

田中 律子

六月は月初めに芒種があり、七月二日頃の半夏生までが仲夏となる。芒種の頃から田植えが始まり、十日過ぎ頃から梅雨に入る。かつては田植えは半夏生までには済ませるものとされていた。農事に於ては気ぜわしい六月である。農事に関わりのない身にも、何か心急かされる思いの六月なのである。

くちなしの烟れるごとく夕暮るる

高野 達子

梔子の白い花がうつすらとかすんできて次第に暮れてゆく。いつまでも明るかった夏の夕べも梔子の花と共にようやく暮れはじめた。掲句は梔子を詠みながら同時に夏の日暮れを詠んでいて味わい深い。単に梔子というと梔子の実（秋の季語）のことになるが、掲句は梔子の花の白さや香気も感じられ花であることがわかるように詠まれていて、季語の認識は確かである。

火取虫ころんと起きてまた飛び

鈴木 富代

昔は夏の灯火に集まってくる蛾をよく見かけたが、冷房設備が整った現在の家屋では蚊蛾の光景はほとんど見なくなつた。掲句の火取虫は金亀子のことであろう。金亀子はどこから入ってくるのか、突然灯火のまわりをぶんぶん騒々しく飛び回り閉口させられる。電灯にぶつかって床にぼとりと落